文部科学省だより〔第四十九回〕

文部科学省　初等中等教育局　教育課程課　教科調査官
豊口　和士

これからの書写・書道教育 (24)

平成29年3月に小学校・中学校、平成30年3月に高等学校の学習指導要領が改訂・告示され、令和2年4月に小学校、令和3年4月に中学校、令和4年4月に高等学校（年次進行）でスタートした新しい教育課程も、今年度をもって小学校、中学校、高等学校のすべての校種で実施されることになります。

新しい学習指導要領の趣旨、新しい学習評価の考え方、GIGAスクール構想等に基づく学習指導もさらに充実していくものと思います。今次の改訂ですべての教科・科目において示された育成を目指す資質・能力の確実な育成に向けて、学校教育現場では不断の努力が続いていることと思います。学校だけでなく、社会全体で児童・生徒の学びと成長を支援してまいりましょう。

本連載では、今次改訂を踏まえた、これからの書写・書道教育と、関連する事項について紹介していきます。

今回は、前回（令和6年4月号）に引き続き、高等学校学習指導要領芸術科書道の中に新設した〔共通事項〕について、できるだけ噛み砕いて解説していきます。

（以下、前回の内容の再掲示）

二〔共通事項〕の内容

（1）「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア　用筆・運筆から生み出される書の表現性とその表現効果との関わりについて理解すること。

イ　書を構成する要素について、それら相互の関連がもたらす働きと関わらせて理解すること。

〈書及び書の美を捉える上での四つの視点〉

① 時間性と運動性
② 書の表現性
③ 書を構成する要素
④ 造形性と空間性

④ 造形性と空間性

【造形性】

書は視覚芸術であり、造形芸術である。それゆえ、書には、視覚によって捉えられる文字及び文字群の造形がある。

書は、文字の形（形状、形象）あるいは複数の文字や文字群としての全体の形を視覚によって捉えるものであることは言うまでもありません。視覚で捉えられる形が平面であれ立体であれ、形として視覚によって捉えられるのであれば、その形が「造形」ということになります。

「造形性」とは、対象となるものの造形が持つ性質がそのものの在り方を特徴づけている場合、造形が持つそうした性質のことと捉えてよいでしょう。書に限らず、表現されたものの造形は、自然の営みによって生み出され形作られ、ただそこに存在するという自然物のようなものではありません。人によって造形として表現されたものには、表現の意図、表現された思いや感興等が必ず背

景にあり、また、それをいかに造形し表現するかについての工夫が図られています。それが芸術としての表現であれば、特別な場合を除き、いかに美しく造形し表現するかの工夫が図られています。そして、その表現の手段、用具、材料、形式等の違いにより、その表現がいかなる芸術として捉えられるか（例えば、音楽、絵画、彫刻、工芸、書道、舞踊、文学等の芸術形式）が定まり、それぞれの芸術形式独特の表現上の性質に基づいて、造形及び表現が工夫されることになります。

（以下、引用文中にルビを追加した。）

表現においては、文字としての規範性を確保しながら、表現上の対象として様々に文字及び文字群の造形を工夫することになる。均斉、均衡、変化、統一等の「造形性」に、「時間性」や「運動性」が生み出す「律動性」が加わって様々な「形態美」が生じ、その先に「調和の美」がもたらされる。加えて、用具・用材による濃淡・潤渇等の「墨色の美」、用筆・運筆や筆鋒の開閉から生まれる「線の美」も「造形性」を担うものとして捉えることができる。

書の「造形性」に、「時間性」や「運動性」により生じる「律動性」が加わって、「形態美」、さらには「調和の美」がもたらされます。そして、書の「造形性」を担う「墨色の美」や「線の美」等の、書の造形における多様な美は、それらの「調和」として結実し、「書の美」を形作る「造形性」として捉えられます。

【空間性】

書は平面芸術でありながら、表現においては言葉を書き記し、鑑賞においては書かれた過程、書きぶりを読み解くことから、「時間性」を特質としてそなえている。また、身体の動き、「運動性」がそのまま視覚化・具体化される書は、平面の表現形式でありながら立体的な運動がそこに刻まれ、余白にも視覚上の造形を超えた意味や価値が込められている。鑑賞においても、言葉や運筆のつながりによる余韻や間を感じ取るなど、「運動性」を読み取ることが求められる。このように、書は、「時間性」と「運動性」の複雑な関連に基づく書独自の「空間性」を特質として併せもつ。

書の「空間性」は、他の芸術形式に比べて複雑な構造の「空間性」を持っていると考えられます。

一般に、造形芸術における「空間」は、対象となる事物の存在形式を「次元」の視点から捉えて考えられます。書は平面ですので、存在形式は必然的に二次元となりますが、表現する際の運動がそのままに軌跡として視覚化・現象化されることにより、鑑賞される際には二次元の形から三次元の運動を読み取ることになり、同時に、余白から奥行きや価値を感じ取ったり、言葉や運筆のつながりから余韻や間を感じ取ったりします。

書は、言葉を書き、それを読むという過程を伴うことによる「時間性」（音楽や文字のような時間芸術における「時間」の性質）と、上記のような三次元の性質も持った「運動性」に基づく、書独自の「空間性」を性質として持っています。

そこで構想され鑑賞される美は、用筆・運筆の「運動性」による動静、緩急、抑揚、強弱、伸縮、軽重、気脈等の「線の美」や、言葉及び運筆の「時間性」による「余白の美」などということになる。さらに、筆者の思いや感興を背景に、「時間性」や「運動性」、「空間性」等の特質を強く帯びて生じる書の美は、書のよさや美しさの本質とも言うべき「風趣」へとつながることになる。

書は、用具・用材の多様な特質・特性に基づく様々な要素と、それらの要素により生じる多様な美が複雑に作用し合い、さらにそこに書独自の「時間性」や「運動性」、「空間性」が関わり、それらが調和した「造形性」、さらには「風趣」（趣や風韻等）として書の美は捉えられるのです。

（次回に続く。）